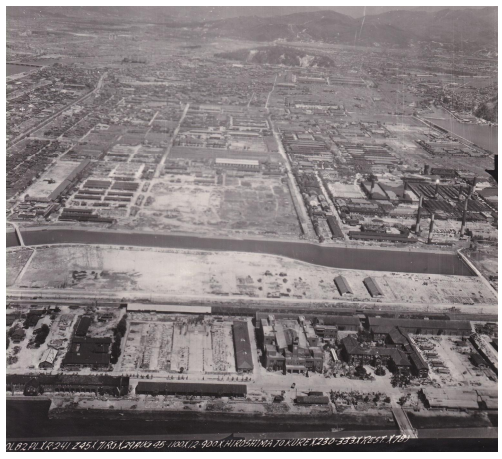
6. 原爆投下





戦後間もなく米軍が空撮した宇品港
数金さんが原爆に遭遇した宇品港。手前中央右寄りが船舶司令部の凱旋館、左奥が広島市中心部。　個人蔵　広島市郷土資料館 画像提供



爆心地から 4000m、数金さんの被爆場所に近い宇品陸軍船舶練習部内から撮影されたきのこ雲。近すぎて上端が見えず「きのこ」の形状に写っていない。
SA099-2　木村権一／撮影
広島平和記念資料館／提供



10 月 2 日に撮影された被爆した兵士
この兵士は、爆心地から約 2,000ｍで被爆しました。熱線の陰となった帽子や顎の下、襟元は無傷ですが、それ以外に火傷を負っています。
アメリカ国立公文書館　蔵

8 月 6 日の朝、数金さんは爆心地から 4500m ほど南方にある宇品港で、１５人ほどの兵隊達とともに新兵用の軍服や毛布を運び出す作業に従事していました。ふと空を見上げると、はるか上空を 2 機の B 29 が南西から東の方に向けて飛んで行くのが見えます。「たった 2 機では空襲では無かろう。」気に留めることもなく視線を戻し作業を再開した数金さんは、突然目もくらむような凄まじい光に包まれました。よく原爆の爆発を形容して「ピカドン」といいますが、閃光は雷のような「ピカッ」という一瞬ではなく、強烈な照明のように 5～6 秒も続いたそうです。その直後、戦闘帽に上半身裸で作業していた数金さんは、素肌にジワジワッと熱さを感じ、咄嗟にその場に積んであった毛布の山の間に身を伏せました。と、同時にドカーンという凄まじい衝撃。伏せている自分の体が地面から２０～30 センチ浮き上がったと感じました。頭上を駆け抜ける光と熱、衝撃波が収まり顔を上げると、広島中心部からもくもくと巨大な雲が沸き上がり、青い空がどんどん暗くなっていきます。「ガスタンクが破裂したんだ」兵士達の間では、そんな噂話が広まっていました。

巨大すぎる雲が気になりつつも再びリヤカーで毛布を運搬し始めた数金さんが何気なく遠くに目をやると、30 歳位でしょうか、背中に赤ちゃんを負ぶった小柄な女性が、片手に 4 歳くらいの子供の手を引き、もう一方の手には荷物を下げ、とぼとぼと市街地からこちらに向かって歩いて来るのが見えました。そして、作業を続ける中、間近までやって来た母親を何気なく見た数金さんは、はっと息を呑みました。その母親の顔面はひどく焼けただれていたのです。やがて、その親子に続くように重い火傷を負った市民が続々と避難してきた宇品港周辺は大混乱に陥ります。数金さん達が、あの爆発はガスタンクではなく、広島に落とされた「新型爆弾」らしいと聞いたのは、爆発から 2 時間も経った後のことでした。

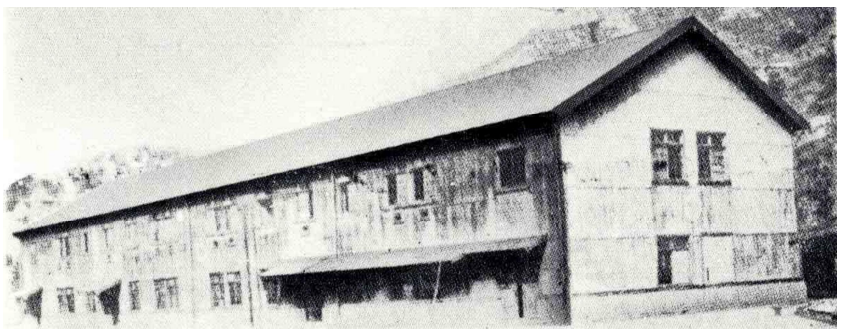


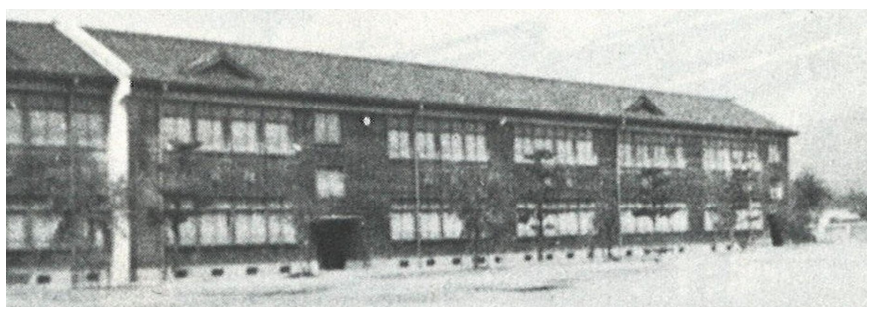
爆心地から 1200-1400m、広島第２陸軍病院臨時救護所テント内。皮膚の露出した顔面や手足に火傷を負った人々が地面に広げた毛布の上に収容されています。当日はどこの救護所でも薬も医師も足りず、火傷に油を塗ったり、包帯を巻くといった簡単な手当しか出来ない情況でした。数金さんが救護活動を行った鯛尾宿舎も同様の情況であったと推察されます。

SA017-2　川原四儀／撮影
広島平和記念資料館／提供



救護活動の合間なのか、破壊された駅舎で休息する陸軍兵。　アメリカ国立公文書館 蔵





数金さんの所属部隊の宿舎として使用されていた鯛尾の軍施設（上）と仁保国民学校(下)。それぞれ原爆で負傷した市民が多数収容され臨時の救護所となりました。
画像(上)坂町教育委員会提供
画像(下)仁保小学校創立百周年記念誌より

広島市内の情況が判明すると共に、海岸で被害の少なかった船舶部隊が直ちに救助活動を開始します。散乱した瓦礫と猛火で使用できない道路に換えて、小型船舶を用いて河川から市内に進入し多くの負傷者を後方に搬送、建物の消火や道路の啓開、遺体収容等の任に当たりましたが、放射線に関する知識の無いまま多くの兵士が入市被曝する原因となりました。

その頃には数金さんの部隊でも当初の作業を中断して宇品港から 150 人あまりの負傷者を鯛尾の宿舎まで運び、炊事場の脇にあったセメントのたたき状の場所に臨時救護所を設けて看護に当たったそうです。８月の炎天下、負傷者を畳半畳ほどの大団扇で扇いであげている兵隊もいました。収容された負傷者の多くは全身にひどい火傷を負っており、「兵隊さん、水をください、水をください」とせがみます。当時、重傷患者に水を飲ませると助からないとされていたので、数金さん達はやたらと水をあげることはできませんでしたが、明らかに生存の見込みのない重傷者にはそっと水を飲ませてあげたそうです。すると本当に美味そうに水を飲み、そして死んでしまう。かわいそうでかわいそうで泣き出したい気持だったそうです。

懸命の手当も虚しく多くの方々が息を引き取りましたが、ご遺体を移動させる担架も無く、兵隊４人掛かりで手足を持って運ぶしかありませんでした。また、傷の痛さからか喉の渇きからなのか、自ら海や川に飛び込んで死んでしまう人も相次ぎました。宇品の桟橋周辺で遺体を引き上げる作業を行った際、少なくとも３００体は引き揚げたそうですが、あまりの遺体の多さに火葬場に運ぶことも叶わず、これらの遺体は空き地の仮設火葬台でまとめて火葬するしか無かったそうです。数金さんは焼かれるご遺体を見ながら、これらの方々の死の瞬間の恐怖や苦痛を思わずにはいられませんでした。